

# 「やけど、熱傷」について

熱傷は、熱や化学物質等による皮膚や組織の損傷で、一般的には「やけど」「火傷」などとよばれます。

**熱傷の程度：** 主に皮膚や組織の損傷の**深さ**と**面積**で判定。

熱傷の**深さ**は大きく3段階に分類されます。(図下)



熱傷の深さ	外観	症状	治療期間
I 度	発赤、紅斑	痛み、熱感	数日
浅達性 II 度	水疱、浮腫 発赤	強い痛み 灼熱感	1~2 週間
深達性 II 度	水疱、浮腫 びらん	強い痛み 知覚低下	4~5 週間
III 度	蒼白、炭化	痛みなし 脱毛	1 ヶ月以上

図下: 表皮、真皮、皮下組織の断面図。深さの矢印は「深い」方向を示す。

### I 度熱傷

表皮のみのやけどで、症状は皮膚が赤くなる程度の軽いものです。3~4日ほどで赤みは減少していきます。

損傷は表皮にとどまっているので、炎症を抑える軟膏を用いながら自然治癒をめざします。

### II 度熱傷

真皮まで達し、水疱(水ぶくれ)が発生するやけどです。

真皮の浅い部分までの損傷で、赤

い水疱ができる「浅達性 II 度熱傷」と真皮の深い部分まで達し白い水泡ができる「深達性 II 度熱傷」に分類されます。

水疱ができるために湿潤を維持しながら、感染予防が必要な場合は軟膏などの使用も行います。

### III 度熱傷

皮膚全層に達したやけどで、皮膚は茶色もしくは壊死して白色になり、感覚がなくなるため痛みを感じません。

「深達性 II 度熱傷」、「III 度熱傷」の場合には熱傷の後の皮膚が異常に盛り上がる肥厚性瘢痕(はんこん)や動きに制限がでる拘縮(こうしゅく)などの後遺症が残ることもあります。

自然治癒することは原則ありません。多くの場合、壊死組織を除去し上皮がつけられるのを待つか、植皮術が必要となります。

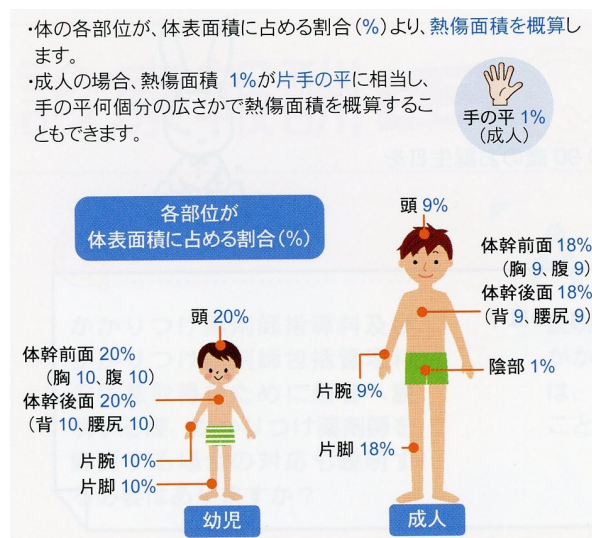
熱傷の**面積**の概算には大人は「**九の法則**」を、小児では「**五の法則**」が用いられます。(図 右)

身体のそれぞれの部位の面積が、体表面積の**9%**またはその倍の**18%**に相当するとして簡略化し、やけどの面積を概算する方法です。

小児は成人に比べて頭頸部の表面積が大きいので、火傷の概算には「**五の法則**」を用います。

およそ手のひらくらいのがさが**1%**に相当します。

大人の場合は、全体の**20%以上**、小児であれば**10%以上**に熱傷が及ぶと生命の危険があり全身管理が必要になります。



## 熱傷の重症度の分類：

熱傷の重症度は面積と深さを基準に決められます。（II度とIII度の面積を参考に次の3段階に分けられます。）

**重症：**II度で30%以上、またはIII度で10%以上の場合、また特殊部位（顔・手・生殖器など）の熱傷、気道熱傷、化学薬品や電気によるものは重症と判断されます。

**中等症：**特殊部位を含まない、II度で15～30%の範囲、またはIII度で2～10%の範囲

**軽症：**特殊範囲を含まない、II度で15%未満の範囲、またはIII度で2%未満の範囲

## 熱傷の予防など

幼児の場合には、熱傷の8割では居室と台所でおこっています。熱傷を起こしやすい場面の危険度ランキングは、1位：調理食品（みそ汁やめん類、シチューなど）、2位：ストーブ、3位：電気ジャーポット、4位：花火、5位：電気アイロン〈国民生活センター調べ〉となっています。幼児の場合、本人では気を付けられないので、周囲の大人が責任を持ちましょう。

主婦に多い熱傷は、料理中に揚げ物をしていて、油がはねて腕や顔にかかったり、誤ってやかんやポットの湯をこぼして体にかけてしまうことなどが挙げられます。

火傷の熱源の温度と暴露時間が組織の損傷に影響を与える主な因子となります。

そのなかで<低温やけど>は意外と危ないのです。電気毛布や電気あんか等による<低温やけど>は、心地よいと感じる温度（40度～50度程度）のものに長時間皮膚が接することで起こります。

（50度なら3分間の圧迫、42度でも6時間接触すれば細胞が変化するという報告があります。〈国民生活センター調べ〉）。<低温やけど>は、じわじわと皮膚の深い部分まで達するので、痛みを感じにくく、特に子どもはやけどをしたことに気づかず、重症となる傾向があります。

## 熱傷を受けたときには、速やかな対応が必要です！

### まず、熱源を断つこと！

- ・熱湯による場合。多くの場合、熱源はすでにありませんから、次に速やかに冷やすこと！
- ・火による場合。速やかに冷やすことは同じです。しかし、まだ衣服が燃えている場合などは熱源の除去、すなわち消火が急がれます。

### 次に冷やすこと！

- ・小範囲の熱傷であれば水道水で。広範囲であれば浴室のシャワーで冷やします。  
\* 冷やす時間についてはいろいろな意見がありますが、一般的には最低5分から30分程度、できれば流水で冷やします。ただし小児の場合、長く広範囲を冷却すると低体温をきたし、意識障害や不整脈など全身に影響を起すことがあります。そうしたことに注意しながら、過度の冷却とならない注意が必要です。

### そして重症度を評価する！ それにより次の対応が変わります。

- ・重症度は基本的には面積と深さで決まります。  
\* 面積について：簡単に熱傷面積を算出する方法として、成人に対しては「九の法則」、小児には「五の法則」（前述）がありますが、多くの場合、受傷の現場でゆっくりと面積を計算している余裕はありません。  
\* 深さについて：表面の色調から深度をI～III度に分類（前述）します。I度～II度（浅達性II度）は浅く、創部は赤色を呈します（お湯による熱傷など）。II度（深達性II度）～III度は深く、白色や灰色（時に茶褐色）を呈します（火による熱傷など）。

また特殊部位（顔・手・生殖器など）の熱傷、気道熱傷、化学薬品や電気によるものは重症と判断されます。

### \*\*\* しばらく様子を見ても大丈夫な場合 \*\*\*

- ・赤いだけで水ぶくれ（水疱）ができておらず、痛みが軽い場合
- ・範囲が狭く（500円玉以内）、第1度程度のやけどの場合
- ・軽く、範囲が狭くて関節部などではない場合

図は、「ENIF 医薬ニュース」Vol.26 No.15 2017」から引用しました。

この「診療所だより」や診療についての御意見・御要望などをお気軽にお寄せ下さい。  
これからの参考にさせていただきます。

編集・発行： 勝山諄亮

勝山診療所

〒639-2216 奈良県御所市343番地の4（御国通り2丁目）  
電話：0745-65-2631